花の階級―金学鉄の政治小説『20 世紀の神話』に見る中国の階級闘争

The Class of Flower-The Chinese Class Struggle Depicted in a Political Fiction of XUETIE JIN *The 20th Century Myth*

南　鉄心
Tiexin Nan

はじめに

マルクスは間違っている。

マルクス主義の「弁証法的唯物論（唯物弁証法）」は、古典的観念論を「転倒」させ、世界創造の起源を神やコギトから物質や自然に置き換えることによって新たな「神話」を作り上げた。マルクスとその息子たちは、この「神話」によって自らが「神」となった。勿論、ここで言っている「マルクスの息子たち」は、マルクス主義の継承者・理論家であり、そしてその改造者・捏造者でもあるスターリン、毛沢東、金日成などを指している。

大雑把に言うならば、マルクス主義の「唯物弁証法」は、ヘーゲルの「弁証法」とフォイエルバッハの「唯物論」を批判的に受け入れ、ヘーゲルの「絶対者」に「物質」を、フォイエルバッハの「食欲」に「革命」を置き換えたものである。これは科学でもなければ、ましてや宇宙の真理でもない。なぜならば、「神」、「絶対者」、「コギト」の位置に「物質」、「自然」、「人間」を置き換えても「神の学」や「コギトの学」の思想的構図は変わらないからである。ヘーゲルにとって思惟の範疇と考えられた「弁証法」を、物質的な過程に置き換えようとしたその試み自体に、最初から無理があったのかもしれない。しかし、マルクスは哲学についての世界の思索を変化させた。つまり、哲学の仕事を世界の解釈から世界の変革へと変えたのである。

マルクス主義の鍵理論の一つは、階級闘争の理論である。「共産党宣言」（1848 年）においては、「今日までのあらゆる社会の歴史は、階級闘争の歴史である」と規定され、階級闘争は社会発展の原動力として位置づけられている。

階級闘争の革命理論を中国の現実状況に適応させ、「農村から都市を包囲する」という戦略を採ったのが毛沢東である。中国共産党は、この戦略のもとで国民政府を打倒し、武力で政権を取り、やがて 1949 年に中華人民共和国を建国させた。しかし、政権を取った後も階級闘争理論は継続化され、政治的気風が濃くなるにつれて段々と絶対化された。「階級闘争を要にする」というのが社会主義建設の基本方針となったのである。

建国以後の中国の政治運動を見ると、全国で 20 万人の自殺者数を出した 1951、52 年の「三反・五反運動[19]」、全国で 50 万人以上を失脚、下放（地方に送り出すこと）させ、投獄した 1957 年の「整風運動[20]」と「反右派闘争[21]」、2000 万人以上の餓死者を出した 1958

---

[19] 「三反」は、1951 年に提唱された国家機関または国営企業に対する方針。「反汚職・反浪費・反官僚主義」など。「五反」は、1952 年に提唱された私営企業に対する指針。「反賄賂・反脱税・反手抜き工事・反国家財産横領・反国家経済情報悪用」など。三反運動の当初の目的は横領防止であったが、内部告発が奨励され、383 万人の文民職員が厳しく尋問や審査にさらされ、拷問もなされた。さらに 1952 年からは五反運動も加わった。三反・五反運動による自殺者の合計は少なくとも 20 万人に昇ったと言われている。

[20] 「整風運動」とは、中国共産党が、党員の思想と活動態度の刷新を目的として行った教育運動・思想改造運動をいう。抗日戦争期の 1942 年～44 年にかけて行われた延安整風運動がその原型と言われている。この運動は、1957、58 年にも展開された。1957 年 4 月に発動された整風運動は、同年 2 月の毛沢東の報告「人民内部の矛盾を正しく処理する問題」、3 月の「中国共産党全国宣伝活動者会議における講話」

年の「大躍進[22]」と「人民公社[23]」、3000 万人以上の虐殺数を出した 1966 年の「文化大革命[24]」など、その内容と形式には少し差があるものの、その根底に共通して存在するのが階級闘争の理論である。

朝鮮民主主義人民共和国の国民でありながら金日成独裁政権の粛清を避けて中国へ亡命してきた小説家・金学鉄が 1965 年に書いた政治小説『20 世紀の神話』は、中国の「反右派闘争」、「大躍進」、「人民公社」を背景に、「右派分子」に分類された知識人たちが強制労働収容所で受けた受難の歴史を描いた作品である。

この論文は、政治と文学の関係から『20 世紀の神話』を分析し、テクストの中の現実、特に階級闘争を中心に、テクストの「内部」と「外部」の相互関係性について論ずることを目的にする。

１．政治と文学

「文学はイデオロギーではない」と言うのもひとつのイデオロギーである。この意味で、すべての文学はイデオロギーである。

「人間は政治的動物である」とプラトンは言っている。広義での「政治」の概念には、国家・政府によって行われる統制に関するさまざまな活動だけでなく、それ以外の社会の意思決定に関わる活動や、それに伴う社会活動なども含まれている。文学はイデオロギーである以上、政治から逃れることができない。他の言い方をするなら、政治は文学ではないが、文学は政治なのである。

特にある国、例えば、スターリン時代のソ連、毛沢東時代の中国、金日成父子時代の北朝鮮などがそうであるが、このような国では、殆どの文学が政治性を持っている。政治なしでは文学を論ずることさえできないくらいである。

金学鉄の『20 世紀の神話』は、「反右派闘争」から「文化大革命」の前夜に至るまでの極左路線一辺倒の中国社会を時代背景に、毛沢東に対する個人崇拝と、それによって国家の民主と法制が破壊され、人権が無残に蹂躙されていく社会の暗黒を暴露、批判した政治小説である。

を思想的指針として、党内における官僚主義・セクト主義・主観主義を一掃し、党員の大衆からの遊離を防ごうとしたものである。このため、中国共産党は「百家斉放・百家争鳴」運動を通じて民主党派や知識分子から党に対する積極的批判を求め、整風の推進を図った。しかし、この運動は共産党の思惑を超えて拡大し、党の指導性そのものに対する攻撃にまで及んだため、6 月から「半右派闘争」へと転換していった。

[21] 1957 年 6 月 8 日、毛沢東は「組織的な力で右派分子の狂気じみた攻撃に反撃せよ」という指示を出し、『人民日報』は社説で「右派への容赦なき批判」を呼びかけた。反右派闘争の発動である。中共はただちに全国各地で右派分子の取り締まりを始めた。もともと組織の基盤が弱い党外人士はたちまち壊滅状態に陥った。1957 年末までになんと 55 万 2877 人が右派分子という無実の罪を着せられた。彼らはみな市民権を剥奪され、辺地での強制労働に駆り出され、生き地獄を経験することとなった。

[22]「大躍進」とは、 近代的な共産主義社会を作ることを目的に、1958 年から 1960 年まで実施された農工業の大増産政策である。毛沢東は生産力理論に基づき、この政策を実施した。しかし、農村の鉄鋼生産などを進めた結果、少なくとも 2000 万人といわれる餓死者を出し、大失敗に終わった。このため毛沢東の力は低下し、権力回復を目的に文化大革命が起こることとなった。

[23] 1958 年、毛沢東の指導の下、大躍進運動の開始と共に合作社の合併により組織され、生産手段の公社所有制に基づく分配制度が実施される。これにより、農村では人民公社と呼ばれる地区組織をひとつの単位とした社会の中でそのすべての住民が生産、消費、教育、政治など、生活のすべてを行うようになった。

[24] 1966 年から 1976 年まで続いた、封建的文化、資本主義的文化を批判し、新しく社会主義文化を創生しようという運動。実態は毛沢東らが引き起こした権力闘争である。大躍進政策の大失敗により国家主席を辞任し、劉少奇に指導権を移譲した後、修正主義への後退という危機感を深めた毛沢東が、国家の路線と権力を再び自らに取り戻すために仕掛けた大規模な権力奪還闘争である。文化大革命の期間中、行方不明者数を含めた虐殺者数は、推計で約 3000 万人～7000 万人と言われている。

政治小説とは、政治、あるいは政治と関連するものを素材とする小説、あるいはその内容が政治的性格をもつ小説をいう。実際の政治事件を扱う作品もあれば、政治的状況を仮想して書いた作品もある。

チェコ生まれの作家、フランツ・カフカの『審判』(1925 年)、『城』(1926 年)、イギリスの作家、ジョージ・オーウェルの『動物農場』(1945 年)、ソ連の作家、アレクサンドル・ソルジェニーツィンの『イワン・デニーソヴィチの一日』(1962 年)、『癌病棟』(1969 年)、『収容所群島』(1973 年) などが政治小説の典型である。

『イワン・デニーソヴィチの一日』、『癌病棟』などは、スターリン時代が終わり、フルシチョフの思想刷新によってソ連社会が解氷期を迎えた時期の産物である。

中国大陸で、特に 1965 年の時点で、金学鉄の『20 世紀の神話』ほど毛沢東への個人崇拝、大躍進、人民公社、反ソ連ヒステリーを痛烈に批判した作品はない。この作品は中国の反右派闘争、大躍進政策、人民公社運動などを扱っているだけでなく、朝鮮とソ連の政治的背景、中ソの理念紛争などにも言及する国際性を有した政治小説である。

1956 年 2 月、ソ連共産党第 20 回大会の秘密報告でフルシチョフはいわゆる「スターリン批判」を行い世界に衝撃をもたらした。『20 世紀の神話』もこの衝撃の産物である。このような政治小説を書くためには政治的判断力と洞察力、そしてそれを書くための勇気が必要であった。

作家金学鉄は反右派闘争の犠牲者である。しかし彼は徹底した共産主義者でもある。このような彼に、『20 世紀の神話』を書く勇気と信念を与えたくれたのがソ連の「第 20 回党大会」である。

この作品では、主人公の一人である林一平の経歴を紹介する時、「一平が大学を出たのはソ連共産党の歴史的な第 20 回大会が開かれたその年の夏であった[25]」と記述されている。また、もう一人の主人公、右派分子の瀋朝光が自分のせいで息子が学校で虐められるのを知った時の心理を次のように描写している。

> ソ連共産党第 20 回大会の人間に対する深い配慮に満ちた決議、人道主義的決議の巨大な意義を彼はその時やっと完全に分かった理解した[26]。

この時期、中国でも中国共産党の「第 8 回党大会」が開かれた。「中央では第 8 回党大会が開かれ、個人崇拝に反対する問題が議題にあがった[27]」のである。この会議の精神に従って、自治州作家協会の会長であった瀋朝光は次のような発言をする。

> 「…大袈裟に言うのではありません。事実上、我が文学は現在『毛沢東時代の朝』、『金日成時代の正午』、『胡志明時代の夜』といった既成文句で代替されてしまう危機に直面しています…[28]」

ここからも分かるように、金学鉄の『20 世紀の神話』は個人崇拝に反対し、人間性、人間の権利を擁護しなければならないというソ連共産党第 20 回大会でのフルシチョフの秘密報告の影響を深く受けているのである。

『20 世紀の神話』の主人公・瀋朝光がソ連共産党第 20 回大会と中国共産党第 8 回大会

---

[25] 金学鉄『20 世紀の神話』、創作と批評社、1996 年、p.23.
[26] 金学鉄『20 世紀の神話』、創作と批評社、1996 年、p.136.
[27] 金学鉄『20 世紀の神話』、創作と批評社、1996 年、p.31.
[28] 金学鉄『20 世紀の神話』、創作と批評社、1996 年、p.31.

以後、個人崇拝に反対する精神を得たのは決して毛沢東や金日成のような人物に対する憎しみからではなく、尊敬や忠誠心からなのである。

> 続いて瀋氏は感動的な口調で、「我らの敬愛する指導者・毛沢東同志はレーニンと同様に自身に対す賛美を何よりも嫌がっている」と言い、さらに「自分の名前で街道や工場の名を改称するのを禁ずるだけでなく、自分の誕生日に長寿を祈ることさえ禁じている」。「このような偉大なる指導者に仕える我が 6 億の人民は地上で一番幸せな人民である」と言った[29]。

これはソ連共産党第 20 回大会と中国共産党第 8 回大会直後における、作中人物瀋朝光の認識であるばかりではなく、作者である金学鉄の反右派闘争直前の毛沢東に対する認識でもあったかもしれない。

しかし中共の個人崇拝は、ソ連共産党第 20 回大会と中国共産党第 8 回大会以後、むしろさらに強化され、党内や社会生活全般において民主主義の気風は徐々に陰りを見せることとなった。日々人権が蹂躙されている中国の政治的暗黒の中で、初めて個人崇拝に反対し、社会主義思想圏で思想解放の最初の波を打ち出したソ連に対し憧憬の念を抱いている金学鉄の姿を『20 世紀の神話』の中に確認することができる。

毛沢東を代表とする中共とフルシチョフを代表とするソ共との間で一大論戦が開かれる直前の 1961 年に、金学鉄は極左路線一色の中国を放棄し、ソ連への政治亡命を図るのである。その時のことを金学鉄は次のように述べている。

> 私は北京のソ連大使館に逃げ込んで亡命の申請をしようと決めた。今まで私の家族は朝鮮の国籍をそのまま保有していたので何の問題もなく、完全に可能なことであった。しかし残念ながら私はソ連大使館の正門の前で中国警察によって物理的に阻止された。阻止され、その怒りで 1 対 2 の格闘を繰り広げたが、結局は衆寡不敵でそのまま「拉致」され延吉に強制連行された。怒鳴らないように口を塞がれていたため、いくら喚いても効果はなかった。生(なま)の劇であった。一足（片足は抗日戦争中切断された）が四足に負けるしかなかった。私はやがて偶像崇拝の迷夢から目覚めはじめた。個人崇拝と決別したのである。…害悪を残さず暴露し、天下に警鐘を鳴らすことに決めた。決心はしたものの手際も分からず震えるだけであった。（ありえないことだ。私が毛沢東に反対するとは、こんな私は狂っているのではないか）銃刑に処せられる光景が見えた。この時期の毛沢東は、6 億 5 千万人の中国人民にとっては神様であり、太陽であった。偉大なる慈愛深い「救いの星」であった。私は何度も決心を繰り返したが最終的には筆を執った。良心が恐怖に勝ち抜いたのである[30]。

金学鉄は、1957 年から右派とみなされ、過酷な迫害を受けている最中の 1961 年に北京

---

[29] 金学鉄『20 世紀の神話』、創作と批評社、1996 年、ｐ.31.
[30] 金学鉄『抗日独立軍最後の分隊長』、文学と知性社、1995 年、ｐ.376－377.

のソ連大使館に逃げ込んでソ連に政治亡命をしようとしたが、中国警察の阻止を受け、延吉に強制連行されてしまった。右派分子の罪の上に親ソ分子という新たな罪が重なり、その怒りと反発で『20 世紀の神話』を書き始めたのである。そして翌年の 1965 年に 27 万字の原稿を脱稿した。1966 年 7 月、個人崇拝、大躍進を批判した政治小説『20 世紀の神話』の原稿が紅衛兵の家宅捜査によって発見され、没収された。そして同年 12 月、『20 世紀の神話』を書いた罪で金学鉄には懲役 10 年の判決が下された。

２．文学の「内部」と「外部」

歴史として過ぎ去った過去（現実の世界）は、それを経験した人々の記憶や、それに関連する書物の中に、痕跡や記録として眠っているだけである。それを再現することはわれわれにはできない。

人間の意識は伝達の機能を持っている。事物は事物を伝達することができない。事物は意識を通してのみ伝達可能である。しかし意識は不安定な要素を多く含んでいる。意識は常に不安定であり、意識の伝達には常にずれが生じる。

反映論にしても表現論にしても、文学が現実の中から生じることには疑問の余地がない。すべての表現は現実から来る。われわれには存在しないものを表現することはできない。いや、存在しない物事さえも存在する物事を通してのみ表現可能であると言うべきであろう。

文学が現実を反映するにしても、表現するにしても、文学の事実は現実の事実ではない。この意味で言えば文学の「内部」と「外部」は分離されている。しかし「内部」と「外部」には境界線がない。文学の「内部」は「外部」にとっての「内部」であり、文学の「外部」は「内部」にとっての「外部」である。「内部」と「外部」はひとつの扉のこちら側と向こう側のようなものである。「内部」と「外部」は自由に往来できる開かれたものである。

文学の内容と形式も同じように考えることができる。これをもっと広げると、精神と物質の関係も同じである。精神（性質、性格）なしの物質は存在しない。同じように、物質なしの精神（性質、性格）も考えられない。精神と物質は同一かつ同質のものである。つまり、精神は物質であり、物質は精神である。不思議に思われるかも知れないが、これもひとつの世界観である。

中国社会の現実の中に、「反右派闘争」、「大躍進」、「人民公社」、「強制収容所」などが存在したというのは歴史的事実である。これは金学鉄の『20 世紀の神話』の中の「反右派闘争」、「大躍進」、「人民公社」、「強制収容所」と如何なる関係にあるのか。それらは現実のそれでありながらそれではない。曖昧な言い方に聞こえるが、二つの関係は事実上曖昧である。

現実の事実と作品の事実の関係を以下のように分類してみよう。

１．　現実の事実を通して作品の事実を考える。
２．　作品の事実を通して現実の事実を考える。
３．　作品の事実と現実の事実を相互関係で考える。
４．　作品の事実と現実の事実を完全に分離して考える。

最初の 3 つの分類は文学、社会学の実践の中でよく目にする方法であるので、ここでは最後の分類のみについて触れてみよう。しかしその可能性についてではなく、それがいかに不可能であるかについて論じてみることにする。

早速、作品の「内部」に入ってみよう。

テクストは、「鉄条網で囲まれていない強制労働収容所に再び春がやってきた[31]」という一文から始まって、「鉄条網で囲まれていない世界最大の強制労働収容所に再び冬が迫ってきた[32]」で終わっている。

これだけでも分かるように、これは「強制労働収容所」に関する物語、あるいは「強制労働収容所」での生活に関する物語である。最初の「春」と最後の「冬」は対照的であるが、これは希望と絶望、生と死を想起させる。喜劇で始まり、悲劇で終わる可能性を暗示しているのだ。

このテクストからはひとつの疑問が浮上する。「強制労働収容所」がなぜ「鉄条網」に囲まれていないのかということである。そこに収容されている人は自由なのか。自由なら「強制労働収容所」の「強制」は何を意味しているのか。この疑問に答えてくれる一節がテクストの中に存在する。

> ―共産主義農場は解体されたのではなく、960 万平方キロメートルの幅でその範囲が広がっただけであった！[33]

つまり、中国大陸全土が「強制労働収容所」になってしまったということになる。それでは「強制労働収容所」で、人々がどんな生き方をしているのか見てみよう。

> 飢えて顔が黄色く浮腫んで、もとの面影をほとんどなくしている以前の『アリラン』編集者、林一平が今、馬草桶の中からこまめに選んで食べているのは馬草に混ざっている豆油粕であった。 牛小屋の外では先に食べ終えたバイオリニストの蔡氏が堆肥を積み上げるふりをしながら代わりに見張りをしていた[34]。

民族雑誌の編集者とバイオリニストが牛小屋で牛の餌（豆油粕）を盗み食いしているのである。これはまさに 20 世紀の「神話」であり、20 世紀の「伝説」である。この「強制労働収容所」に収容されている人の構成を見てもそうである。

> 鉄条網で囲まれていない文明の強制労働収容所―「共産主義農場」には、党を攻撃した各種の人民の敵 100 人ぐらいが収容されているが、その大半が知識人であった。学校の校長、検察所長のような大物から医師、記師、判師、画家、俳優、歌手、記者、アナウンサー、そして大学生や高校生に至るまで広範囲の知識人たちが集められ、まるで人物陳列館の別館みたいな感じがする[35]。

強制労働収容所に収容されているのは、反党・反社会主義の知識人である。彼らが反党・反社会主義分子とされたその「罪悪」を並べてみるとそれもまた壮観である。これもまさに 20 世紀の「神話」、20 世紀の「伝説」である。

> ところで、知ってみれば自治州で言われている反社会主義分子とい

[31] 金学鉄『20 世紀の神話』、創作と批評社、1996 年、p.8.
[32] 金学鉄『20 世紀の神話』、創作と批評社、1996 年、p.348.
[33] 金学鉄『20 世紀の神話』、創作と批評社、1996 年、p.216.
[34] 金学鉄『20 世紀の神話』、創作と批評社、1996 年、p.8.
[35] 金学鉄『20 世紀の神話』、創作と批評社、1996 年、p.25－26.

うのはたいしたものではなかった。

酒の席で「マッコリを売る飲み屋がないので楽しくない」と勝手にしゃべった人は「社会主義中国を生き地獄である南朝鮮にもおよばないと批判した」ので「ブルジョア右派分子」であり、

不潔に唾を吐く同僚を「汚いよ、中国人みたいじゃないか」と笑いながら阻止した人は「兄弟民族である漢族を劣等民族だと侮辱した」ので「ブルジョア民族主義分子」であり、

党支部書記に「非党員に対して多少偏見が混じっている」と意見を述べたり、その意見が正しいと主張した人々は「集団で共産党を攻撃した」ので「反共集団」であり、

学術討論の席で「当座預金」を「活期存款」と言い、「卸売所」を「批発部」と言うなどの漢語直訳を乱用するのは妥当でないと討論したり、その討論に共鳴した人々は「社会主義大家庭の言語の統一を破壊しようと企てた」ので「反動集団」であり、

小説に未亡人の悲しみを描写した人は「幸せな社会主義社会の未亡人に悲しみがあるなどと事実を歪曲した」ので「党内」あるいは「党外」右派分子であり、

戯曲に卜術屋が吉凶を占ったのが偶然に当たったのを描写した人は「意識的に迷信を唱えて唯心論を鼓吹した」ので「党外」あるいは「党内」右派分子であり、

詩に豆満江対岸の故郷を懐かしいと歌った人は「中華人民共和国を祖国でないといったのと同じである」ので「極悪な民族主義分子」であり、

歌詞に「賢い先祖の血を引いて」という文句を書いた人は「わざと伝統に対する認識を混乱させた」ので「狡猾な民族主義分子」であり、

党支部書記の意見を「十」の中で「九」だけを賛同した人は「反動分子」であり、

校正のミスで「大砲団」を「代表団」に直しておかなかった人は「反革命現行犯」であった[36]。

「頓馬」というあだ名で呼ばれている公務員彭氏は、ある会議中の発言で、「解放前にも飢えたが解放後にもまた飢えるとは、はっきり言って皆が良い、良いという社会主義社会の何処が良いのかよく分かりません[37]」と言ったのが原因で右派分子とされ、強制労働収容所に送られるが、その時彼は、「(共産) 党はいつも正しい。党が私を右派というから、きっと私が右派であるに違いない[38]」と思い、素直に服従するのである。毛沢東時代の中国で人々は頭の使用権さえも剥奪されてしまったのである。

「6億の蒼生(そうせい)が革命のために自分たちの頭脳の使用権を全部偉大な舵取り・毛沢東陛下に委託し、自分たちは手足だけをこまめに動かすと契約を結んだがゆえに、毛沢東時代の中国はまるで頭は一つだけなの

[36] 金学鉄『20世紀の神話』、創作と批評社、1996年、p.32－34.
[37] 金学鉄『20世紀の神話』、創作と批評社、1996年、p.153.
[38] 金学鉄『20世紀の神話』、創作と批評社、1996年、p.154.

に足が数十億個も付いている蚰蜒みたいな怪物になってしまった[39]」

テクストの中の「大躍進」時代とは、「目に見える猫は全部殺され、食べられてしまい、猫という種が絶滅する時期[40]」であり、「干葉を盗んで派出所に呼び出される時期[41]」であった。ナチスが滅びる前、戦火中のドイツ国民は「屋上のウサギ」という遠回しの言葉を使ってこっそり猫の肉を販売したというが、毛沢東時代の中国人民は大躍進という天下太平の時期に遠回しの言葉も使わず、堂々と猫の肉を煮て食べた。

> 大躍進中期には、商店の売台がガランと空いているのを見て「売台がガランと空いている」と目で見たものを見たとおりに話した分別がない間抜けらが強制労働収容所に引きずられて行った。また大躍進末期には、「自然災害説」に疑問を抱いて「日照りのせいではないようだ」と勝手にぺちゃくちゃしゃべった無分別な愚かものが強制労働収容所に送られ、思想改造を迫られた。
> 概して毛沢東時代の中国大陸に言論の自由がないというのは途方もないデマゴギーだ。 強制労働収容所に収容された反動分子らに尋ねてみても分かることだが、もし言論の自由がなければ、この反動分子らがどのようにして「売台がガランと空いている」とか、「日照りのせいではないようだ」とか、自分勝手にぺちゃくちゃしゃべりまくることができただろうか。中国大陸で神聖な言論の自由が、神聖な首を切られる自由とともに確かに保障されているということは、天下の正直な人々がみなよく知っていることだ。 これに対して万が一、わずかでも疑問を持つ方がおられるならば、その方は必ず胸に手をおいて「私はこれまでに、ドルを受け取ったことがないか」「私はこれまでに、ルーブルを受け取ったことがなかったか」と反省をしてみる必要がある[42]。

「人民公社」というのも酷いものであった。「機関では執務を中止し、木の皮をはがしに雪道をかきわけて山に登らなければならなかったし、また工場では作業を中止して雪の中に埋められた落葉を拾いに野原に出て行かなければならなかった。いろいろな木の皮や木の葉でお粥の煮方とお餅の作り方を伝授する伝習会が随所で開かれた。子供であれ大人であれ、はいたズボンがしきりに下がってしまうので革帯に穴を空けるのに精一杯であった[43]」のである。

> ご飯をただで食べさせる人民公社は大飯食いの養成所となり、労働量を量らない人民公社は文字どおり怠け者集合所に変わった。勢い良かった大躍進はいよいよ暗礁に乗り上げてしまい、幸福が渦巻いていた人民公社はついに底が抜けてしまった[44]。

---

[39] 金学鉄『20 世紀の神話』、創作と批評社、1996 年、 p.261.
[40] 金学鉄『20 世紀の神話』、創作と批評社、1996 年、 p.16.
[41] 金学鉄『20 世紀の神話』、創作と批評社、1996 年、 p.16.
[42] 金学鉄『20 世紀の神話』、創作と批評社、1996 年、 p.16－17.
[43] 金学鉄『20 世紀の神話』、創作と批評社、1996 年、 p.15.
[44] 金学鉄『20 世紀の神話』、創作と批評社、1996 年、 p.14.

以上見てきたのは、テクストの中の「反右派闘争」、「大躍進」、「人民公社」、「強制収容所」の姿である。これらは現実とは何の関係付けもなしに読むことができる。テクストの中だけでも完璧なひとつの世界が広がっている。その世界にはそれなりの社会関係が形成され、そしてその社会関係の中でそれぞれの人物が登場し、それぞれの役割を演じている。しかし、レクチュール（読解行為）はエクリチュール（記述行為）の反復ではない。つまり、レクチュールは書かれてあるものだけを読むのではない。書かれてないものさえもが読まれてしまうのである。

想像力について考えてみよう。読解中の想像力、それはどこから来るのか。読解中の想像力とは、書かれているものから書かれてないものへの飛躍を可能にするものである。想像力は文学の「内部」から「外部」へ、そして「外部」から「内部」へと駆け巡る。つまり、想像力が働く限り、文学の「内部」と「外部」は互いに開かれているのである。論理的に言うなら、完璧な「内読」（内部だけに潜り込む読み方）は不可能である。

それは本論文についても当てはまる。この論文にはタイトルと署名がある。そして「はじめに」から本文に入り、「１．政治と文学」、「２．文学の『内部』と『外部』」、「３．花の階級」を通して、最後に「終わりに」で本文が終わる。そして脚注と参考文献が付されている。これら全ての部分はお互いに関連性を持っている。例えば、この節にある「大躍進」という言葉は前節に出てくるし、脚注にも現れる。また、この後の節にも出てくるかも知れない。すでに明らかなように、この論文の脚注のある部分は他の事典からの借用である。

文学の「内部」に入ることは、文学の「外部」に出ることでもあるなだ。

３．花の階級

ある日、林一平が妊娠中の妻が心配で早めに仕事を終え、家に帰ってくると、妻は窓辺に座り、チューリップを眺めていた。そのチューリップは高校時代の化学の先生から結婚のプレゼントとして贈ってもらったものである。

> 「体の調子は如何だ？」
> せっかちな夫が急いで尋ねると、妻はだるい声で、
> 「この植木鉢……持って行って川に捨ててください。川の一番深い所に捨ててください」と訳の分からないことを言い出した。
> 「何か可笑しいぞ。急に、その植木鉢どうかした？」
> 「早く捨ててください。理由は後で言いますから[45]」

一平が川の堤防に立って植木鉢を何処へ捨てたらいいのか悩んでいると、もう一人の男が、やはり植木鉢を持って彼に近付いて来た。近寄って来て、一平に話しかけた。

> 「あなたも、その植木鉢……捨てに来たのですか」
> と親切に話しかけてきた。一平がそうであると肯くとその男は、
> 「私もです。家内が長男を生んだのが丁度十日前でした……大切にしていたゴムの木だったので、捨てるには惜しいから川に持っていって綺麗に水葬してくださいと頼まれたので……それでここまで持って来たのです」

[45] 金学鉄『20 世紀の神話』創作と批評社（1996 年） p 250

と聞いてもいないことをしゃべり出した。
「子供を生むことと植木鉢と何の関係があるんですか。なぜ植木鉢を捨てるんですか。訳が分からない……」
「子供を生むために植木鉢を捨てる？誰が？」
「誰が？先にあなたがそう言ったじゃないですか。長男を産んだので植木鉢を捨てに来たと」
「私はそんなことは言ってません」
「でも私にはそう聞こえました」
「とんでもない」
「ではなぜその植木鉢を捨てに来たのですか。そこにお化けでもついているんですか」
「このご時世にお化けとは」
「では、なぜ？」
「では、あなたはなぜ？」
「私ですか。私は家内に言われたので捨てに来ただけです」
「それで理由も問わず、ここまで持って来たということですか。それは可笑しいでしょう[46]」

子供を生むことと植木鉢を捨てること。この偶然の一致が一平を当惑させた。理由が分からない一平には理解できないことであった。子供を生むのになぜ植木鉢を捨てなければならないかが。実は、それは政治的な原因によるものであった。

「これから婚礼式は、みな毛主席の肖像の下で、何もなしにすることにしました。贈り物箱には、『毛沢東選集』一冊だけを入れ、葬式でもこれからは喪服を着用せず、霊前には何も供えないことにしました。『何やら全部口だけで払え』という意味でしょう。そしてこの植木鉢というのは、本来ブルジョアジーの玩具みたいなものだそうです。私たちみたいな百姓には良く分からないが、それで今回、全部片付けてしまうことにしたそうです。もうお分かりになりましたか。なぜ植木鉢を捨てるか、その理由を？」
（中略）
一平はブルジョアジーの玩具というチューリップを川の深いところに水葬した。その帰り道に彼は狂ったように一人で笑い始めた。
頭が正常な人なら笑うしかないだろう[47]。

昔、趙高[48]は、是非を転倒し、鹿を指して馬だと言った。しかし、それは決して馬や鹿のことを知らないからではなかった。世論を左右し、徒党を組んで個人の利益を求めるのが目的だった。 人を盲目的に従わせ、論争する勇気すら与えなかったのである。
20 世紀 50 年代の中国で、花はブルジョアジーの玩具だといわれている。これは階級闘

[46] 金学鉄『20 世紀の神話』、創作と批評社、1996 年、 p.250－251.
[47] 金学鉄『20 世紀の神話』、創作と批評社、1996 年、 p.252.
[48] 趙高（生年不詳、210BC に死去）、秦朝の宦官で、秦始皇帝の崩御後、丞相の李斯および秦始皇帝の次男胡亥とともに聖旨を捏造し、太子扶蘇に自殺するよう命令し、胡亥を皇帝に即位させた。その後、趙高は胡亥と対立する。ある日、趙高は一匹の鹿を王城に入れこみ、公然とこれが馬であると称した。その場の朝臣の何人かが異議を唱えた。趙高はこれらの者を政治的反対派であると考え、彼らを罷免した。

争が極致に至った結果である。毛沢東と中国共産党の愚民政策の傑作である。

毛沢東は 1957 年 10 月に開かれた中国共産党第 8 期中央委員会第 3 回全体会議の席上で無産階級と資産階級、社会主義と資本主義の矛盾について語り、それを当面の主要な矛盾であるとしながら、この矛盾を改善するための基本的な八大方針を打ち出した。毛沢東は、1959 年 8 月の盧山会議で彭徳懐の批判を「階級闘争」であると位置づけ、1962 年党の第 8 期 10 回中央全体会議でさらに、社会主義社会全体に、無産階級と資産階級間の階級闘争は常に存在する。また社会主義と資本主義の 2 つの路線が存在すると言った。階級闘争と資本主義が復活する危険性については、常に討論しなければならないと語った。1963 年 2 月の中央活動会議で毛沢東は、湖南、河北などの地域で行われた社会主義教育運動の経験を総括し、階級闘争を要にすればすぐに効果が出るとの考えを述べ、党全体にむけて「階級闘争」を忘れてはならないと強調した。1957 年から、全党、全国での各作業場で「階級闘争を要とする」というフレーズが使われ、その後「無産階級の独裁の下に革命を続行する」という理論の重点的な要素となっていった。これが『20 世紀の神話』の背景にある「階級闘争」の真実である。

20 世紀の「神話」、花が花でない時代、花がブルジョアジーの玩具である時代、花にも階級があった。

終わりに

2004 年 11 月に発表された『大紀元時報』の社説、「九評共産党」には次のような一節がある。

「共産党が唱える『闘争の哲学』の目的は大乱を作り出し、動乱を絶やさず、一党独裁の教主の地位を樹立することにある。ひとつの党の思想で全国民は統治され、政府・軍隊・新聞・テレビ局は、全て共産党の行う暴政の党具となっている。共産党が中国にもたらした災厄は、すでに手の施しようがなく、今はもはやそれ自身が滅亡の危機に直面している」。

「中国共産党政権の成立から 55 年間の歴史は、暴力と欺瞞で記された歴史である。その流血の裏にある事実は、残酷かつ非人道的であるばかりでなく、ほとんど世間に知られていない。中国人の 6 千万ないし 8 千万もの罪のない人々の命が犠牲となり、更に多くの家庭が迫害された」。

自らの国民を 8 千万人も殺した政党―独裁政権が今も中国の政権を握っている。これが現実である。世界の、人間の、文学の事実である。これを無視して、何ができるのか。勿論、政治は文学ではない。しかし文学は政治である。政治であるに違いない。

蒙上眼睛就以为看不见
（目を隠すと　見えないだろうか）
捣上耳朵就以为听不到
（耳を塞ぐと　聞こえないだろうか）
而真理在心中 创痛在胸口
（真理は心の中に　創傷は胸の中に）
还要忍多久 还要沉默多久
（何時まで堪えるのか　何時まで沈黙するのか）

（―天安門事件の歌、「歴史の傷口」から）

文化大革命の終わる頃、誰かが叫んだように、今現在、叫ばなければならない。

「沈黙の中で死ぬのではなく、沈黙の中で爆発するなだ」と。

参考文献：

韓国語文献
金学鉄『抗日独立軍最後の分隊長』、文学と知性社、1995 年
金学鉄『太行山脈』（散文集）、延辺人民出版社、1998 年
金学鉄『私の道』（散文集）、延辺人民出版社、1999 年
金学鉄文学研究会『最後の分隊長－金学鉄』(1)、延辺人民出版社、2002 年
金学鉄文学研究会『最後の分隊長－金学鉄』(2)、延辺人民出版社、2005 年
金学鉄文学研究会『金学鉄論－若い世代の視覚』、延辺人民出版社、2006 年

日本語文献
丸山　昇『文化大革命に至る道』、岩波書店、2002 年
矢吹　晋『文化大革命』、講談社現代新書、2007 年
厳家祺・高皋（辻　康吾訳）『文化大革命十年史』（上）、岩波書店、2007 年
厳家祺・高皋（辻　康吾訳）『文化大革命十年史』（中）、岩波書店、2003 年
厳家祺・高皋（辻　康吾訳）『文化大革命十年史』（下）、岩波書店、2003 年